

第 31 回アジア土木学協会連合協議会 (ACECC) 理事会ならびに 第 7 回アジア土木技術国際会議 (CECAR7) 参加報告

ACECC 担当委員会

山口栄輝 前委員長 (九州工業大学)、中野雅章 前幹事長 (日本工営)、岡村未対 幹事 (愛媛大学)、井澤 淳 幹事長 (鉄道総合技術研究所)、山本芳樹 幹事 (日本工営)

1. はじめに

2016年8月29日～30日にアジア土木学協会連合協議会 (Asian Civil Engineering Coordinating Council: 略称 ACECC) の第 31 回理事会 (31st Executive Council Meeting: 略称 31st ECM)、8月31日～9月2日に ACECC 主催の第 7 回アジア土木技術国際会議 (7th Civil Engineering Conference in the Asian Region: 略称 CECAR7) が、米国ハワイ州のホノルルで開催された。

ACECC は、アジア地域の土木関連学協会を束ねる連合組織として、1999年9月に発足した。現在は加盟国が 13 か国となり (日本、米国、フィリピン、台湾、韓国、オーストラリア、ベトナム、モンゴル、インド、インドネシア、バングラデシュ、パキスタン、ネパール)、多国間連携のもと、アジア地域が抱える社会資本整備や土木技術に関する課題を討議し、問題解決を図ることを主たる役割としている。土木学会は、ACECC 発足当初からのメンバーであり、ACECC の活動で常に中心的な役割を果たしている。

2. 第 31 回 ACECC 理事会

ACECC 理事会 (ECM) は、ACECC の最高議決機関であり、年に 2 回の頻度で開催されている。会議にはメンバー学協会会長等の代表者が出席し、ACECC の運営方針や活動内容について協議する。31st ECM には、田代民治土木学会会長をはじめ、土木学会からは 13 名が参加した (写真 1)。

31st ECM に先立ち、技術委員会 (TC) の進捗報告や新規委員会の承認を目的とした技術調整委員会 (TCCM) と ACECC の活動の詳細を議論する企画委員会 (PCM) が開催され、そこでの議論が ECM で審議・承認された。

日本からは、主導する 3 つの技術委員会 (鉄道技術、ITS 技術、減災・防災) に関する活動報告を行い、さらに今後の具体的な活動についても提示し、活発な意見交換が行われた。

また、次世代のリーダーとなる土木技術者の育成が重要であるとの認識の下で設置された小委員会からは、“Future Leader Forum” を開催することが提案され、各国から 25～30 歳までの若手技術者の代表者を募って議論する機会を設けることが承認された。

次回 32nd ECM は来年 4 月にネパールのカトマンズで開催される予定である。

3. 第 7 回アジア土木技術国際会議 (CECAR7)

CECAR は、各学協会会長をはじめ、産官学の主要メンバーが一堂に会する国際会議で、3 年ごとに開催される、ACECC の一大イベントである。第 1 回 CECAR は 1998 年にマニラで開催され、ACECC 設立のきっかけとなった。第 7 回目を迎えた CECAR7 は、米国土木学会 (The American Society of Civil Engineers: 略称 ASCE) が運営を担当し、“Ho-‘omalalama: Building A Sustainable Infrastructure In The Asia Pacific Region” をテーマに開催され、29 か国から 388 名が参加

した。

(1) 開会式

会議の初日、CECAR7 運営委員長 Udai P. Singh 氏、合衆国下院議員 Tulsi Gabbard 女史のスピーチからなる開会式があり、CECAR7 が開幕した。引き続き、WFE0（世界工学団体連盟）副会長の石井弓夫元土木学会長が、昨年開催された WECC2015(第5回世界工学会議)の“Kyoto Declaration”について講演され、「地球温暖化対策のみならず、社会に関わる様々な分野で工学の力を生かそう」という力強いメッセージが発信された（写真2）。

(2) 基調講演および一般講演

ACECC からの招待講演である基調講演は 6 件あった。日本からは高知工科大学学長の磯部雅彦元土木学会長が“2011 Great East Japan Earthquake Tsunami and Future Nankai Trough Earthquake Tsunami - Experience and Preparation”と題して講演された。

ACECC のメンバー学協会や技術委員会が企画し、運営するオーガナイズドセッションでは、土木学会は、津波セッションを担当し、高橋智幸氏（関西大学）を中心に我が国の津波対策技術をアピールした。

一般講演は公募に応じた研究発表で、運営委員会の審査を経た論文に基づいた発表である。口頭およびポスター合計で 6 会場に分かれて 216 件の研究発表があり、日本からの発表が 87 件と最も多かった。

上記に加え、土木学会が主導している TC 活動の成果についても一般講演や特別セッション等で報告した。

TC-12 “Railway Technology Renewal and Expansion in the Asia Region”（委員長：奥村文直氏（鉄道総合技術研究所））については、一般講演の一部で複数の TC メンバーが活動内容を発表し、成果報告として、井澤（鉄道総合技術研究所）より“Railway Construction Summary”の内容が紹介された。温暖化や気候変動などが大きな問題となっている昨今、他の交通手段と比較して環境負荷の小さい鉄道は、今後、アジア地域で建設されることが想定されることから、ACECC の活動を通じて、各国との技術連携が進むことが期待される。

TC-16 “ITS-based Solutions for Urban Traffic Problems in Asia Pacific Countries”（委員長：牧野浩志氏（国土技術政策総合研究所））については、一般講演の中でその成果について発表し、坂井康一氏（東京大学生産技術研究所）により、他の ACECC メンバーと共に議論を重ねて完成した「ITS Introduction Guide」が紹介された。本ガイドラインは ACECC や土木学会の Web サイトからダウンロード可能であり、今後アジア各国で活用されることが期待される。今後は第二期の活動を開始し、Case Study の情報収集等を通して、本ガイドラインを更新していく予定である。

TC-21 “Transdisciplinary Approach for Building Societal Resilience to Disasters”（共同委員長：竹内邦良氏（ICHARM））は、本 TC の最初の会合としてパネル Discussion 形式のセッションとして運営され、塚原健一氏（九州大学）の他、フィリピン、韓国、台湾、アメリカのパネラーが各国の取組を紹介した。会場はほぼ満席で、活発な議論が交わされ、アジアにおける防災・減災の取組に対する関心が高いことが改めて認識された（写真3）。TC21 は 11 月にフィリピンで、

4月にネパールでシンポジウムを行うことが予定されており、その活動を通して分野を横断した ACECC ならではの議論が今後ますます活発化することが期待される。

(3) ACECC 賞

ACECC は、プロジェクト賞 (ACECC Civil Engineering Project Award) と業績賞 (ACECC Civil Engineering Achievement Award) を設け、CECAR で表彰している。

プロジェクト賞は、直近の概ね 3 年間に、土木技術の進歩とアジアの発展に顕著な貢献のあったプロジェクトに授与される。今回は、首都高速道路 (株) の「中央環状線 山手トンネルの建設 (The Construction of Yamate Tunnel on the Central Circular Route)」が、韓国、台湾、インドネシア、ベトナム推薦の 4 件と共に、Civil Engineering Project Award の荣誉に浴した。

業績賞は、国際的な土木技術の進歩や、アジアまたは ACECC 加盟国の社会資本の発展に顕著な貢献があり、その業績が国内において認められている ACECC 加盟国に属する個人に授与される。土木学会が推薦した住吉幸彦氏 (日本支承協会顧問、元土木研究所所長) をはじめ、3 名が受賞した (写真 4)。

(4) 閉会式

今回の CECAR8 は、2019 年に東京で開催され、土木学会がホストとして運営を担当する。CECAR7 の最終日、閉会式において、ASCE の Woodson 会長より田代会長に ACECC 旗が手渡され、ASCE から JSCE への引き継ぎが完了した。この日をもって、ACECC 会長には JSCE の日下部治氏 (国際圧入学会会長)、CECAR8 組織委員会委員長に茅野正恭氏 (鹿島建設)、企画委員会委員長に岡村 (愛媛大学)、技術調整委員会委員長に中野 (日本工営) が就任し、新たな ACECC 体制が発足した (写真 5)。また、ACECC 事務総長として、堀越研一氏 (大成建設) も引き続き従事される。

4. おわりに

ACECC は単なる学会の結集組織ではなく、アジアの社会資本整備の促進を実現すべく、各国の Decision Maker や金融機関との協働関係を構築するユニークな組織である。土木学会では、CECAR8 を、そのビジョンを発信・共有するユニークな国際会議とすべく、実現に向けての準備を開始した。2019 年は東京オリンピック・パラリンピック競技大会の前年にあたる年でもあり、国内外の参加者にとっても魅力的な年と言える。また、東日本大震災から 8 年を経過し、復興した場所のみならず、防災まちづくりなど、強靱かつしなやかになった日本の姿をみせることはアジアの国々にとって有意義であると思われる。今後も ACECC 内での土木学会の役割が益々大きくなっていくものと思われる。



写真 1 : ACECC 理事会の様子



写真 2 : 開会式の様子 (左 : Gabbard 女史、右 : 石井 JSCE 元会長)



写真 3 : TC21 の会場の様子 (右上 : フィリピン Momo 共同委員長、右下 : 竹内共同委員長)



写真 4 : ACECC 賞授賞式の様子 (左中央 : 首都高の並川氏、右 : 住吉氏)



写真 5 : 閉会式の様子 (左 : Woodson ASCE 会長、中央 : 田代会長、右 : 日下部 ACECC 会長)